

主 題：救いの本質と目的 ①

聖書箇所：エペソ人への手紙 2章1-7節

きょうから3回にわたって、エペソ2：1-10をとともに学んでいきたいと思います。この1-10節は大きく三つに分けることができます。日本語で句読点というのがありますよね？「。」がつくと一つの文章になるのですけれども、ギリシャ語でも日本語の句読点にあたるものが存在します。それを仮に「。」としておきますと、1節から始まる文章で「。」は7節まで出てこないです。つまり1-7節が一つの文章です。次の「。」が9節に出てきますので8-9節が一つの文章になります。そして10節が一つの文章になります。

きょうのメッセージのテーマは、救いの本質とその目的です。まず救いの目的について最初に結論から申し上げたいと思います。2：7に救いの目的が書かれています。「それは、あとに来る世々において、このすぐれて豊かな御恵みを、キリスト・イエスにおいて私たちに賜る慈愛によって明らかにお示しになるためでした。」、恵みを明らかに示すために救いがあるのです。1章から読んでいくと、神の栄光がほめたたえられますようにと何回か出てきます。6節を見ると、神の恵みの栄光がほめたたえられますようにとあります。つまり私たちは救いの目的は私たち自身だと思いがちです。救いは私たちが救うためにあるのではないのかと。ところがみことばを見ると、救いの目的は、私たちではなくて、神の恵みの栄光がほめたたえられるためであるとあります。そのことはこれから3回にわたってともに学んでいく時にもう少し明らかになればと願っています。

では救いの本質とは何でしょうか？私たちは罪人であり、神が私たちの罪のためにイエス様を送ってください、そして十字架において私たちの罪を贖ってくださいました。私たちは主イエス・キリストの十字架を信じることによって罪が赦される、それが救いですとお答えになるかもしれませんが、これは救われるための手段であって本質ではありません。救いの本質とは何なのか、その答えは、きょう学ぶ1-7節までに書かれています。

皆さんは文章を読まれる時に、どのようなところに注目して読まれますか？たぶんその文章を正しく理解しようとする時には、誰が何をしたのかに注目して読みませんか？誰がとは、文法用語で言うと主語です。何をしたというのは動詞です。主語と動詞、誰が何をしたかに私たちが目を留めて文章を見る時に、その文章が何を言いたいのか明確にわかります。エペソ2：1から始まる文の主語は何だと思えますか？日本語では少しわかりにくいのですが、新約聖書が書かれたもとのギリシャ語を見ると、その答えは明確になります。実は、1節からの文章の主語は4節まで出てこないのです。

「しかし、あわれみ豊かな神は、」の「神」です。これが主語になります。そしてこの主語にかかる動詞が三つあります。一つ目は5節にある「罪過の中に死んでいたこの私たちをキリストとともに生かし」の「ともに生かし」です。この「ともに生かし」は、ギリシャ語では一つの単語になっています。二つ目が6節の「キリスト・イエスにおいて、ともによみがえらせ、」です。「ともによみがえらせ」で一つの単語になっています。そして「ともに天の所にすわらせてくださいました。」、「ともに……すわら」すで、これも一つの単語になっています。つまり主語である神はともに私たちを生かし、ともによみがえらせ、ともにすわらせてくださいました。これが救いの本質です。

「ともに生かす」とは、私たちが教会でよく聞きますけれども、それはどういうことか説明してくださいと言われると、少し困る表現ですよ？ましてや「ともによみがえらせ」とか「ともに……すわらせてくださいました」は、エペソ1章を通読してここにさしかかった時に、何となくわかるかな、こんな感じかなとわかったふりをして読み飛ばしてしまいがちだと思いませんか？ですから救いの本質である

「ともに生かし」、「ともによみがえらせ」、「ともに……すわらせてくださいました」、この三つをきょう皆さんとともに学んでいきたいと思います。

I. キリストとともに生きる

◎救いの本質と目的

救いの本質とは何か？まず一つ目はキリストとともに生きるということです。

エペソ 2 : 1 - 10

「:1 あなたがたは自分の罪過と罪との中に死んでいた者であって、:2 そのころは、それらの罪の中にあつてこの世の流れに従い、空中の権威を持つ支配者として今も不従順の子らの中に働いている霊に従って、歩んでいました。:3 私たちもみな、かつては不従順の子らの中にあつて、自分の肉の欲の中に生き、肉と心の望むままを行い、ほかの人たちと同じように、生まれながら御怒りを受けるべき子らでした。:4 しかし、あわれみ豊かな神は、私たちを愛してくださったその大きな愛のゆえに、:5 罪過の中に死んでいたこの私たちをキリストとともに生かし、——あなたがたが救われたのは、ただ恵みによるのです——:6 キリスト・イエスにおいて、ともによみがえらせ、ともに天の所にすわらせてくださいました。:7 それは、あとに来る世々において、このすぐれて豊かな御恵みを、キリスト・イエスにおいて私たちに賜る慈愛によって明らかにお示しになるためでした。:8 あなたがたは、恵みのゆえに、信仰によって救われたのです。それは、自分自身から出たことではなく、神からの賜物です。:9 行いによるものではありません。だれも誇ることもないためです。:10 私たちは神の作品であつて、良い行いをするためにキリスト・イエスにあつて造られたのです。神は、私たちが良い行いに歩むように、その良い行いをもあらかじめ備えてくださったのです。」

5節に戻っていただくと、「罪過の中に死んでいたこの私たちをキリストとともに生かし」とあります。

「キリストとともに生かし」、これをより理解するために、これとの対照的に書かれている「罪過の中に死んでいた」の「死んでいた」という意味を理解することが重要になります。パウロも同じことを考えていたようで、この前の1-3節において「罪過の中に死んでいた」ということをパウロはより詳しく説明しています。私たちが以前どのような者だったかをしっかりと理解することによって、私たちは今の救いを理解し、救いに感謝してキリストとともに生きることができるようになります。

▶私たちは以前、どのような者であったのか

1. 自分の罪過と罪の中に死んでいた者（1-3）

「罪過の中に死んでいた」とはわかるようでわからない表現ですよ。なぜなら私たちは生きていますから。「死んでいた」とはどういう意味でしょうか？一つの単語をここに入れることによって、少し明確になってきます。あなたがたは自分の罪過と罪の中にあつて「霊的」に死んでいた。「霊的」ということばを入れるとより明確になると思いませんか？私たちは肉体としては生きていたけれども「霊的」には死んでいた。

「罪過」と「罪」とありますが、似たようなことばです。実際似たようなことばですが、これを何回も繰り返すことによってより強調しています。あえて違いを言うのであれば、「罪過」とは「わざとずる」、「知ってずる」ということです。よく子どもがだめだよとされているのに、だめだよと言っている人の目を見ながら、にやっと笑いながらする、これが「罪過」です。アダムとエバが最初に犯したのは「罪過」です。では「罪」とはどういう意味かと言うと、「的外れ」ということです。「的外れ」ということばは、弓道やアーチェリーの用語です。私たちは、弓矢を射る時に、神の基準があつて神の基準から惜しくも外れたとか、神の基準に惜しくも到達しなかったことが的外れだと思いがちです。ところがこのことを学んでいく時に、そんな軽いものではないことがわかります。イザヤ 1 : 4-6に罪とはどういうことかが説明されています。「:4 ああ。罪を犯す国、咎重き民、悪を行う者どもの子孫、墮落した子ら。彼らは【主】を捨て、イスラエル聖なる方を侮り、背を向けて離れ去った。:5 あなたがたは、なおもどこを打たれようというのか。反逆に反逆を重ねて。頭は残すところなく病にかかり、心臓もすっかり弱り果て

ている。:6 足の裏から頭まで、健全なところはなく、傷と、打ち傷と、打たれた生傷。」。ここに何と書かれていますか？私たちは罪人であるけれども、それは私たちが主を捨てた、主を侮った、主に背を向けた、主から離れ去った。私たちは反逆に反逆を重ね、頭のとっぺんから足の裏まで私たちは病にかかったと書かれています。つまり私たちが弓矢を射った時に、惜しくも的から外れたり、届かなかつたりとかいう世界ではないのです。私たちは神様に背を向けて、神様と反対方向に弓矢を射っているのです。ご自分の罪をそのように考えたことがありますか？私たちの罪は、惜しくも神様の基準から外れているわけでも、惜しくも神様の基準に届かないのでもないです。私たちは神様から背を向けて真逆の方向に弓矢を射っているのです。それが罪なのです。そして、その罪が罪だとわかっていながら私たちは罪過を犯し続けているのです。

それゆえにそれらの罪の中にあつて、「この世」の流れに従っていたのだと。「この世」というのはいろいろな意味がありますが、ここでは端的に神に反抗する世を指しています。2節「**空中の権威を持つ支配者として今も不従順の子らの中に働いている霊に従って、歩んでいました。**」、「**空中の権威を持つ支配者**」、これはサタンのことを表します。神に反抗する者の象徴的存在です。それに従って歩んでいました。ヨハネ8：44a「**あなたがたは、あなたがたの父である悪魔から出た者であつて、あなたがたの父の欲望を成し遂げたいと願っているのです。**」、これは、イエス様がユダヤ人に向けて語られたことばです。私たちは、「父なる神様」と祈りますけれども、私たちのもとの姿は、私たちの父はサタンだったと書いてあります。そして神に反抗する世とサタンに従って歩んでいたのだと。この「歩んでいる」ということばは、単純に歩くという意味を表しますけれども、まるでウィンドウショッピングのように、目的もなくふらふら歩くという意味もここに含まれています。そうすると、イザヤ53章のことばが思い浮かびます。イザヤ53：6a「**私たちはみな、羊のようにさまよい、おのおの、自分かつてな道に向かって行った。**」。私たちは罪過と罪との中に死んでいたがゆえに、この世に従い、サタンに従って羊のようにさまよい、しかもその罪ゆえに自分勝手な道に向かって行ったのだと。

そればかりではありません。エペソ2：3に「**私たちもみな、かつては不従順の子らの中にあつて、自分の肉の欲の中に生き、肉と心の望むままを行い、ほかの人たちと同じように、生まれながら御怒りを受けるべき子らでした。**」と書かれています。この「肉」とは私たちの持っている肉体のことです。この「肉」はどういう存在なのか、ローマ8：7に明確に書いてあります。「**というのは、肉の思いは神に対して反抗するものだからです。**」と。私たちの「肉の思いは神に対して反抗するものだからです」をもう少し詳しく見るために、ローマ1：28－32を見ていきます。「:28 また、彼らが神を知ろうとしたがらないので、神は彼らを良くない思いに引き渡され、そのため彼らは、してはならないことをするようになりました。:29 彼らは、あらゆる不義と悪とむさぼりと悪意とに満ちた者、ねたみと殺意と争いと欺きと悪たくみとでいっぱいになった者、陰口を言う者、:30 そしる者、神を憎む者、人を人と思わぬ者、高ぶる者、大言壮語する者、悪事をたくらむ者、親に逆らう者、:31 わきまえない者、約束を破る者、情け知らずの者、慈愛のない者です。:32 彼らは、そのようなことを行えば、死罪に当たるといふ神の定めを知っていながら、それを行っているだけでなく、それを行う者に心から同意しているのです。」。この「彼らが神を知ろうとしたがらない」の「知る」は、ただ単に知識として知ることだけを指すのではなく、知識とともに経験によって「知る」という意味があります。難しいギリシャ語の説明をしなくても、私たちも日本語で「知る」ということについて二つの種類で使っていますよね。私たちは彼について知っている、例えば、「大谷選手について知っている。」というのと、「あんなやつもう知らんわ。」の「知る」は意味が違います。「あんなやつもう知らんわ」というのは、もう彼とは関係ないという意味です。ここで使われている「彼らが神を知ろうとしたがらない」というのは、神と関係がありませんと言っているのです。しかもここを詳しく見ると、そのような思いを心に置いたという意味があります。つまり以前の私たちは、神様と関係を持たないことを心に決めた、そのような思いを心に置いたのです。それゆえに私たちは罪を犯すようになった。し

かも32節に「そのようなことを行えば、死罪に当たるという神の定めを知っていながら、それを行っていた」、これは罪過ですよ。それを行う者に心から同意していた。世に従い、サタンに従っていたのです。それが私たちの救われる以前の生活、救われる以前の姿だったのです。

それゆえに3節の最後に「生まれながら御怒りを受けるべき子らでした」とあります。この「生まれながら」という単語に注目して見てください。私たちは生まれながらに神の御怒りを受ける者でした。真っ白な状態で生まれて、生まれてからの人生この方さまざまな罪を犯したゆえに、神の怒りが私たちに注がれているわけではないのです。私たちは生まれながらに神の怒りの対象だったのです。罪過と罪の中に死んでいたがゆえに、私たちは生まれながらに神の怒りの対象だったのです。それが私たちの救われる以前の姿だったのです。しかも私たちの持っている肉が神に反抗するばかりでなく、私たちは神に反抗する世に従い、神に反抗するサタンに従って歩んでいたのです。なぜなら私たちの持っている本質が神に反抗するものであるから、私たちは何よりもこの世に安住を求め、この世に安らぎを求めるような者だったのです。似た者が引き寄せられるように、私たちはサタンを親として、サタンに従って歩んでいたのです。どうして私たちはサタンに従っていたのですか？それは、サタンこそが私たちが最も求めるものを与えるからです。だから私たちはサタンに従って歩んでいたのです。サタンに引き寄せられていたのです。そしてこの三つが三つどもえとなって、神に背を向け、神に反抗していたのです。そしてこの「生まれながら」ということを考える時に、私たちは罪を犯すから罪人ではないということがわかります。逆なのです。私たちは生まれながらに罪人であるがゆえに罪を犯すのです。それが私たちの以前の姿だったのです。それゆえ私たちは「御怒りを受けるべき子ら」だったのです。誰の御怒りですか？神でしょう？私たちは生まれながらに、私たちを造られた神の怒りの対象だったのです。

「しかし、あわれみ豊かな神は、私たちを愛してくださったその大きな愛のゆえに、罪過の中に死んでいたこの私たちをキリストとともに生かし」てくださったのです。この「しかし」をはさんで全く逆のことが表現されていることに注目してください。神は、私たちに怒っていたのでしょうか？でも神様は私たちをあわれみ愛してくださった。私たちは神の怒りの対象だったのでしょうか？ところが、私たちは神のあわれみと愛の対象に変わったのです。そして私たちは罪過と罪の中に死んでいたのに、キリストとともに生かされる者になったのです。何が起こったのですか？神様の豊かなあわれみと大きな愛が私たちに注がれたからです。この「豊かな」と「大きな」というのは、私たちの人知をはるかに超える豊かさと大きさを表しています。つまりこの逆転の間に、神の豊かなあわれみと大きな愛が私たちに注がれたのです。キリストの十字架による贖い——死が、私たちの上に神様によって与えられた。神様の大きな犠牲がそこにあるのです。余りにも大きいゆえに、それは私たちの人知をはるかに超えた神の豊かなあわれみがなければそれはなされなかったのです。余りにも大きな犠牲であるがゆえに、私たちの人知をはるかに超えた大きな愛がなければその救いはなされなかったのです。そして私たちはそれゆえにキリストとともに生かされる者になった。私たちは救われた時に永遠のいのちを与えられた、それが救いだ

2. キリストとともに生きる者に変えられる（4-5）

ではその永遠のいのちとはどういうものですか？ヨハネ17：3に「その永遠のいのちとは、彼らが唯一のまことの神であるあなたと、あなたの遣わされたイエス・キリストとを知ることです。」とあります。これは、主イエス・キリストご自身の父なる神様に対する祈りのことばです。イエス・キリストがこのように祈っておられます。この「知ること」は、今まで見てきた「知ること」と同じ単語が使われています。つまり救われたことによって神に反抗し、神と関係ない、神様なんて知らないと言っていた私たちが神様の方に向き直って、神様との関係を持ち、神を知る者に変えられたのです。しかも私たちはサタンを父としていたのに、救われたことによって神を父とすることができたのです。これがキリストとともに生きる者に、変えられた姿です。

Ⅱ. キリストとともによみがえらされる (6 a)

エペソ2 : 6 「キリスト・イエスにおいて、ともによみがえらせ、ともに天の所にすわらせてくださいました。」をよりはっきりと理解するのに、実は6節の前にある5節の最後「あなたがたが救われたのは、ただ恵みによるのです」ということばを理解することが重要になります。パウロはずっと1節からこの話を展開していく中で、たまらなくなって叫んだのです。「あなたがたが救われたのは、ただ恵みによるのです」と。ダッシュを用いて強調されています。8節にも「あなたがたは、恵みのゆえに、信仰によって救われたのです。」とほぼ同じことばが使われています。「あなたがたが救われたのは、ただ恵みによるのです」に、8節は「信仰によって」が付け足されているだけです。

私たちが6節を理解する時に、何が助けになるかという「救われたのは」ということばの理解です。この表現はギリシャ語ではとても珍しい表現が使われています。ギリシャ語でも珍しいので、日本語で表現することはもっと難しいです。「救われた」ということばは、ギリシャ語では2文字なのですが、「あなたがたは過去において救われたのですが、その救われた結果が今も続いているのです。そればかりでなく救われた結果によって、今もあなたがたは救われ続け、未来においても救われ続けるのです」という意味なのです。そう聞くと、私たちは救いについての教えを思い出しますよね？救いとは「過去の救い」と「現在の救い」と「未来の救い」があって、これらを全部まとめて救いなのです。私たちは、過去の救いだけを救いと思いがちですが、現在も、未来においてもすべて含まれて救いなのです。「過去の救い」とは“義認”と言われますね。「現在の救い」は“聖化”です。そして、「未来の救い」は“栄化”です。どうしてこのような話をしているかという、6節に「キリスト・イエスにおいて、ともによみがえらせ」とあります。これを一言で言うと“聖化”で、「ともに天の所にすわらせてくださいました。」これは“栄化”を表します。

6節の「キリスト・イエスにおいて、ともによみがえらせ」がなぜ“聖化”のことを表しているのか、ローマ6 : 1-11を見ていきたいと思います。「:1 それでは、どういうことになりますか。恵みが増し加わるために、私たちは罪の中にとどまるべきでしょうか。:2 絶対にそんなことはありません。罪に対して死んだ私たちが、どうして、なおもその中に生きていられるでしょう。(聖化のことを話しています):3 それとも、あなたがたは知らないのですか。キリスト・イエスにつくバプテスマを受けた私たちはみな、その死にあずかるバプテスマを受けたものではありませんか。:4 私たちは、キリストの死にあずかるバプテスマによって、キリストとともに葬られたのです。それは、キリストが御父の栄光によって死者の中からよみがえられたように、私たちも、いのちにあつて新しい歩みをするためです。:5 もし私たちが、キリストにつぎ合わされて、キリストの死と同じようになっているのなら、必ずキリストの復活と同じようになるからです。:6 私たちの古い人がキリストとともに十字架につけられたのは、罪のからだが減びて、私たちがもはやこれからは罪の奴隷でなくなるためであることを、私たちは知っています。:7 死んでしまった者は、罪から解放されているのです。:8 もし私たちがキリストとともに死んだのであれば、キリストとともに生きることにもなる、と信じます。:9 キリストは死者の中からよみがえって、もはや死ぬことはなく、死はもはやキリストを支配しないことを、私たちは知っています。:10 なぜなら、キリストが死なれたのは、ただ一度罪に対して死なれたのであり、キリストが生きておられるのは、神に対して生きておられるのだからです。:11 このように、あなたがたも、自分は罪に対しては死んだ者であり、神に対してはキリスト・イエスにあつて生きた者だと、思いなさい。」。ここで「バプテスマ」ということばが出てきますけれども、私たちが救われた時に受けるバプテスマを指しているのではないことは想像できると思います。当時、このローマ書を読まれた人たちは、バプテスマということばを聞いた時に、共通して思うことがありました。旧約聖書にもいろいろなバプテスマがあるのですが、それを一言で言うと、その人がどんな存在なのかを証明するのがバプテスマだったのです。これはすべてのバプテスマに共通することです。

そのキーワードが例えば3節に「キリスト・イエスにつく」とか、4節に「キリストとともに葬られ」たとか、5節に「私たちが、キリストにつき合わされ」たとあります。この箇所ではキリストと私たちが一つになっていることをバプテスマは表しています。「私たちはキリストと一つにされた」ことをあかしするのが救われた後に受けるバプテスマなのです。私たちは、キリストと一つにされた存在であることをあかしするのです。ここで何を言っているかと言うと、私たちは、以前は靈的に死んでいた者です。それがゆえにキリストは、私たちの罪を背負って、肉体において死なれたのです。そしてキリストは肉体においてよみがえりました。私たちはそのキリストと一つにされたことによって、私たちもともによみがえらされました。私たちがそのことによって靈的に生きる者へと変えられた。キリストの死によって私たちの罪が滅ぼされ、そしてキリストが肉体においてよみがえることによって「キリストにつき合わされている」私たちが、キリストと一つにされている私たちが、靈的に生きる者へと変えられたのです。これがここで言っているバプテスマです。私たちはそのことを証明するために、皆の前でバプテスマを受けるのです。それゆえに私たちはキリストにあって生きた者だと思いなさいと。ですからキリストとともによみがえりというのは、私たちのうちになされる“聖化”、現在進行形で行われている救いについて表されています。現在進行形で“聖化”がなされていないと私たちは救われてはいません。なぜなら救いは過去・現在・未来のすべてを合わせて救いなのです。過去で信仰告白しても今現在私たちがキリストとともに歩んでいなければ、私たちは救われていません。

ローマ6：23に「罪から来る報酬は死です。しかし、神の下さる賜物は、私たちの主キリスト・イエスにある永遠のいのちです。」とあります。「罪から来る報酬は死」であり、神様と全く関係がなくなることで、でも「神の下さる賜物」は私たちの主キリスト・イエスにあって神を知る者へと変えられたことです。キリストとともに生きる者へと変えられたことです。

Ⅲ. キリストとともに天の所にすわられる (6b)

これは先ほど“栄化”を表すと言いましたけれども、“栄化”とは未来のことですよ。では、なぜ「すわらせてくださいました」と過去形で書いているのでしょうか？それはどういう意味かと言うと、この「天の所にすわらせる」というのは希望的観測に基づいて述べられているのではないのです。みんなこうなったらいいよねとパウロが書いているのではないです。わざわざ過去形で書いたのは、もうそれがなったのだ、つまり確実に私たちは天の所にすわられたのだと、パウロはここで強調しているのです。

1. 「天のところ」

エペソ1：20-21に「:20 神は、その全能の力をキリストのうちに働かせて、キリストを死者の中からよみがえらせ、天上においてご自分の右の座に着かせて、:21 すべての支配、権威、権力、主権の上に、また、今の世ばかりでなく、次に来る世においてもとなえられる、すべての名の上に高く置かれました。」とあります。この20節の「天上」ということばと2：6の「天の所」は、ギリシャ語で同じ単語が使われていて、同じ場所を指しています。つまり私たちがキリストとともに「天の所」にすわられました。それはどういうことかと言うと、「天上」において、よみがえった主イエス・キリストは、神の右の座にすわっておられるのです。その神の右の座にすわっておられる主イエス・キリストとともに私たちはもうすわられたのだと、ここでパウロは確信を持ってあかししています。つまり“天”というのは神とともにいる所なのです。これを見る時に、私たちは天の本質と地獄の本質を見ます。

2. 「天」の本質と「地獄」の本質

なぜ皆さんは救われて天に行きたいと思いませんか？なぜ皆さんは天国に行きたいですか？そこには苦しみも悲しみもなく、水晶のように輝くみたいな……そういうところだから、天国に行きたいです、そこで永遠を過ごしたいです。この世も同じ発想をしています。天国とか極楽はそういうところだから皆さんは天に行きたいですか？「天の本質」とは今申し上げたように、神がおられるところです。神とともにいる所です。それが「天の本質」なのです。では、逆に皆さんはなぜ地獄に行きたくないのです

か？火と硫黄の燃える所だからですか？永遠に苦しむからですか？ウジがわいて、暑くて喉が渴いて苦しむところだからですか？私たちはそんなところで過ごしたくないから地獄に行きたくないのですか？そのために私たちは主イエス・キリストの十字架を信じて救われたいと願っているのですか？でも「地獄の本質」はそうではないのです。「地獄の本質」は神との永遠の断絶なのです。これが「地獄の本質」なのです。火と硫黄の燃える池というのはその結果として与えられるものであって、神との永遠の断絶が地獄なのです。

マタイ 7 : 21 - 23 に「:21 わたしに向かって、『主よ、主よ』と言う者がみな天の御国に入るのではなく、天におられるわたしの父のみこころを行う者が入るのです。:22 その日には、大ぜいの者がわたしに言うでしょう。『主よ、主よ。私たちはあなたの名によって預言をし、あなたの名によって悪霊を追い出し、あなたの名によって奇蹟をたくさん行ったではありませんか。』（これはイエス・キリストの名によって行っているのです。本人はイエス・キリストとかかわりがあると思っているのです）:23 しかし、その時、わたしは彼らにこう宣告します。『わたしはあなたがたを全然知らない。不法をなす者ども。わたしから離れて行け。』」とあります。「わたしはあなたがたを全然知らない。」の「知らない」も先ほどからずっと見ている関係がある、ない、経験を通して知る、知らないの「知らない」が使われています。つまりここで「わたしは全然あなたと関係ありません。だからわたしから離れて行きなさい。」と言われています。つまり「地獄の本質」は、神様に背を向けて、神様を知らないと心に定め、神様と真逆の方向に矢を射り、神様に反逆に反逆を重ねた者に対して、「そうか、わたしと関係がなくあなたは歩んできたのですね。わたしと関係がないと心に定めて歩んできたのですね。ではわたしも言いましょ。わたしはあなたとは全然関係ありません。」と神様から言われるということです。マタイ 10 : 30 には「また、あなたがたの頭の毛さえも、みな数えられています。」とあるように、神様があなたのことを知らないわけがないのです。髪の毛の数すらも知っているのだから、私たちが私たち自身のことを知っているよりも神様は私たちのことを知っています。だからこの「知らない」は、あなたとは全然関係ないということです。「離れて行け」と言われて、行く場所が神の永遠の断絶の場である地獄なのです。神との永遠の断絶の結果として火と硫黄の燃える池があるのです。

しつこいですが、もしも地獄というのは名ばかりで、実際地獄に行ってみたら、そこはほんわかとした世界で、今よりも少し涼しくて、Tシャツと短パンだけで過ごせて、火と硫黄の燃える池もなく、ウジ虫もない。自分の飲みたい物や食べたい物も揃っていて、食べたい時に食べ、飲みたい時に飲む。快適で寝たい時に寝て、起きたい時に起きる。それが永遠に続く場だとしたらどうですか？逆にももしも天国が水晶が輝くとは名ばかりで、苦しみも悲しみもないのも名ばかりで、苦しみも悲しみもあるところがだったら、皆さんは天国と地獄のどちらに行きたいですか？名前が悪いですけれども、実態はそうだとしたら。私たちは、苦しみと悲しみがある天国で永遠に過ごさないといけない。逆に地獄は、ほんわかした温かいところで食べたい物を食べ、飲みたい物を飲み、ゆったりと永遠に過ごすことができる場所だったらどっちに行きたいですか？それでも私は絶対に地獄には行きたくないです。なぜならそこには神がおられないからです。天国には神様がおられ、永遠に賛美礼拝できるから、苦しみや悲しみがあっても私は天国に行きたいです。この世の天と地獄と、私たちが聖書から学ぶ天と地獄は全く違います。神がいるか、いないかです。クリスチャン生活もそうでした。私たちは神を知らない、神とは関係ないと歩んでいたのに、神と関係を持ち、神を知る者となり、神とともに生きる者になった、これが救いでしょうか？そして今現在も神とともに生きているでしょうか？そして将来においても、未来においても、私たちは神とともに生きるのです。そこで神を礼拝し、賛美するのです。それが天なのです。そして私たちがもうそれを手にしたかのように、確実に私たちがその天に挙げられることを神様は約束されて過去形で書かれています。

これはちょっと嫌味になりますが、もし礼拝が終わって、1週間聖書も読まなくて、ゴスペルも聞かず、祈りもせず、日曜日になって聖書のほこりをパンパンと払って、礼拝に行くのがしんどいなと思っている人が、万が一天国に行くとしたら、その人にとっては、天国は地獄みたいなものです。神を礼拝し、神を賛美するという自分がやりたくないことを永遠にやり続けなければならないから。だってその人が神とともに歩み、神を礼拝することをもともと求めていないからです。私たちはそれを換えられたでしょう？私たちが求めることは、キリストとともに歩むことであり、将来もキリストとともに歩み、神を礼拝し賛美することです。私たちの救いとは、一貫しています。過去・現在・未来すべてそれです。そのために主イエス・キリストは、十字架にかかり死んでくださったのです、あなたのために。

最初にこのエペソ人への手紙はクリスチャンへ書かれたと言いました。罪過の中に死んでいたと過去形で書かれてあるからと。1-3章までは、神様が私たちになしてくださったすばらしい恵みと祝福の事実が書かれています。そして4章から多くの命令が書かれています。1-3章までは命令がほとんど出てこないです。神様は私たちにかにすばらしいことをなしてくださったか、私たちに祝福を与えてくださったかということ、私たちが知ることによって、4章からの命令を私たちが守りたいと願い、守って歩いていくようにと。きょう学んだこの2：1-7はその1-3章のど真ん中にあります。つまり私たちがキリストとともに歩み、神に喜ばれる者へと変えられていくためには、私たちはこの救いが必要だということです。この救いとか福音は、神様を信じておられない方、教会に新しく来られた方に語るものだと、私たちは思いませんか？しかしこれを見た時に、私たちが福音を語る相手は他にいると言うのです。それは私たち自身なのです。私たちは、毎日毎日自分に向かってこの福音を語り続けなければいけないのです。私たち以前はどんな歩みをしていたのか、私たち以前はどういう存在だったのか、神はそのためにどんな犠牲を払ってくださったのか、私たちはそれゆえにどのように変えられたのか。神様の豊かなあわれみと神様の大きな愛が私たちに注がれたゆえに、私たちは御怒りを受ける者から神様に愛される者へと変えられ、私たちは神と関係ない者からキリストとともに歩む者へと変えられた。そして神様とともに、キリストとともによみがえらせ、キリストとともに天の所にすわらされた。もう約束がなされているのだと。それを私たちは毎日毎日自分自身に語り続けなさい、それが、私たちが神様に喜ばれるキリストに似た者へと変えられる歩みをする一番重要なポイントであり、秘訣です。お題目のように唱えなさいと言っているわけではありません。その一つ一つを自分の歩みの中にあって吟味し、かみ砕き、かみしめながら、自分が御怒りを受ける存在だったとはどういう存在だったのか、罪過と罪の中に死んでいたとはどういう意味なのか、神様の大きな愛と豊かなあわれみとはどういうものなのか、なぜ私たちにそれが注がれたのか、それによって私たちはどう変わったのか、毎日毎日自分に語り続ける。その時に私たちは、キリストに似た者へと、まさにキリストとともに生きる者へと変えられていく。がっちりとキリストと関係を結んで、神と関係ある者として歩むことができる。そしてそのために主イエス・キリストは十字架にかかって死なれたのです。